

環・太田川

2001年7月 若苗号



目次

小林一彦の あしたはどっちだ?!	2
川の漁業史	
っていうかー元オオシキノリが勝手に思う太田川のことで ...	4
インタビューシリーズ	
100%クリーン こちら夢中力発電所	8
太田川水系の鳥	10
絵画・写真で蘇る太田川	11
投稿コーナー.....	12
瀬 音.....	13
いっしょにやりま専科.....	14
「環・太田川」ホームページより.....	15
環KAN学GAKU	16
「環・太田川」進水式 やってきたでー.....	18
オヤ??ニラミ.....	19
みずべの図書館・インフォメーション.....	20

田植え後およそ三週間

梅雨の晴れ間の井仁の若苗

すくすく育てよー

棚田たちは、井仁地区（所帯数二十九・人口七十名）だけでなく、百八十万「太田川市民」の命と水を支えています



いよいよスタート。この先に待ち構えている困難にまるで気付いていないふたり。

河原はつづくよどいまで センチメンタルじゃあにやい！太田川カヌーツアー報告

ブラリスト小林一彦のあしたは

どっちだ?!

去る6月17日、梅雨の中休みでピーカンの日曜日に、

「環・太田川交流会」のイベントの一環として企画された「かつての川舟が往来した航路を探访する、センチメンタルジャーニーなカヌー旅」をやらかした。そう、あの、創刊号で俺がつまらぬ提案をしたばかりに、実現の運びとなってしまうアレである。

スタート地点に選んだのは、戸河内インターから川沿いに車で3分遡った「轟の浜」。ここは川舟航行の発着点として利用されていたところで、なるほど、天然桟橋のごとく平らな岩の岸壁が兩岸を固め、往事を偲ばせる。フネはいつも海で使っているリニアポリエチレン製の5mもあるシーカヤックではかさ張るので、以前、錦川を下るのに使ったドイツ・グラブナー社のゴムカヌー「ホリデーM」を使用。ゴムカヌーと侮ってはいけない。素材には同量の鉄よりも引張り強度にすぐれた特殊繊維が使われており、NASAの装備にも採用されているハイテクギヤなのだ。川下りの実行犯、いや、実行班は俺とテツツンのみで、陸上班は「石垣博士」として名高い佐々木卓也さんのレクチャーを聞きながら、要所を散策するという趣向。

AM 10:20、橋の上からイベント参加者の盛大なお見送りを受けて優雅に出航。テツツンには前日、太田川中流の高瀬堰あたりでカヌーの特訓を施しておいたので、なかなか



出発地点となった轟の浜

パドルの扱いが様になっていく。カヌーの下を60センチはある野鯉がスーッとよぎり、思わず顔がニヤけてしまう。これは愉しいことになるかもしれないぞお！が、橋をくぐって数十メートル先で早くも航行不能。水が膝下までもなく、しかも一抱えもあるような石がゴロゴロ。仕方なくカヌーを降りてライニン

グ（ロープでカヌーを牽引すること）を始めたが、ここで重大なミスが発覚した。シューズのセレクトをしくじったのだ。俺が当日履いていたのは、カヌー用のパドルリングシューズ。これはコケの付着した石の上を歩くには、はなはだ不向きにできており、足を踏み出したとたん俺はいきなりツルリともんどりうって尾てい骨を強打。立ちあがったと思ったら今度は前のめりにつんのめって、空手の試合でも殴られたことのない自慢のハナをカヌーのデッキにぶつけてしまった。俺のカヌーのフィールドはほとんどが海で、渓流域でのこつこつシュチエーションはほとんど未経験なのだ、それにしてもカッコ悪すぎる。テツツンもさぞかしと見れば、意外にも彼は平気でしつかり歩いている。彼が履いていたのはクツ底がフェルト状になった鮎釣り用シューズ。カヌーのライニングは彼に任せ、俺はひたすら不様にツルツルステンーを繰り返しながら石ころだらけの浅瀬をコモドオオトカゲよろしく這いずるハメに。くるぶしもポコポコに打ち付け血もにじんでいる。十数回めの転倒でトドメとばかりに男の急所をしたたかに打たれ、しばし戦意喪失。「お、おのれツツ！カヌーにすがりつくようにしてカウント8でかろつて立ち上がる。「艱難辛苦、汝を玉にす」だと?!これじゃ「艱難辛苦、汝のタマ

タマを打つ！」じゃないか…。

20分の苦闘の末、なんとか第一の難関をクリア。水深1メートル程度の緩やかな流れにやっとこさ辿り着いてカヌーに乗り込む。ヤレヤレだ。気分転換にアイスボックスからビールを取り出してテツツンと乾杯。指先に痛みを感じて、見ると、どこにブツけたのか、いつのまにか爪が割れている。

でも、ようやく流れに乗れてとにかくよかつたですなテツツン。さっきまで気付かなかったが、鳥のさえずりにも心なごむなあ。おまけに海と違い、川は漕がなくても運んでくれるからラクチンじゃわい。一瞬、昔日の川舟乗り達に思いがシंकクロする。ビールもウマイ！

みたいなほんわかムードもわずから5分で終了。無慈悲にも再び石ころだらけのフィールドが眼前に迫ってきた。こもなんとか突破すべく10数分カヌーを担いだり引つ張ったり悪戦苦闘している、今度は行く手に鮎釣りのオッサン達を、水たまり程度の浅瀬に竿を延ばしているのが見えた(こんな状況で釣りになるんかいや?!)。オッサンは「ワシはエントリー料をちゃんと払ったとるんじゃけえの、こつちに来たらゆるさんけんの」と言いたげに、全身で不快感を表現してこつちをギロリと睨みつけている。水量が充分ある場合、カヌーが上を通ったくらいで鮎は逃げたりはしない。が、ただでさえ魚影が少ないのに、ゴロゴロ石だらけの浅瀬をカヌーを担いだ怪しい二人組にジャブジャブ通られたんでは、イジワル以外のなにもでもない、釣り師がナーバスになるのも理解できる。この先、何十回となくこうゆうシーンに出くわし、俺達もそのつどひたすら頭を下げ続けるしかないなら、そのうち卑屈になつて、こつちもグレるぞ。メンドくさあ…。

ふと視線を感じて見上げると、川土手にサポーター隊(と書いても一人だが)の田原男爵が、沖繩のシーサーみたいな不自然な顔つきで突つ立っている。懸命に笑いかみ殺しているのだ。どうやら俺達のブザマな奮闘ぶりが死ぬほどおかしかつたらしい。

「おーい、田原どの!この先もずっとこんな具合なん



難難辛苦汝のタマを打つ?

かあ?この先の状況を教えてくれい!

「ずうーっと同じ。もうヤメとけヤメとけ!」カヌーを一旦岸に引き上げ、土手に登って川下に目をやれば…くお

りの水がチヨロチヨロ流れており、根性のある釣り師がウヨウヨ。川下りどころではない。全身が虚脱感に包まれる。普通、カヌーで川下りをする場合、可能な限り事前に入念な下見をするものであるが、今回はあえてそれをしなかった。「ハブニング」を期待しての意識的なサポータージュだったのだが、これでは度を越している。ここまで水が浅いと予想してなかった。こつちの文字どおり「浅はか」というのだ。つまらぬシャレに苦笑いしつつテツツンに向き直る。自然が相手の場合、あきらめも肝心だ。「こりゃ無理です、ギブアップしましょう」

てなわけで、AM 11:20、あつさりリタイア。伴走車のワンボックスカーにカヌーをたたんで積み、ゴール予定地点の加計(ここではイベントの参加者が、アユを焼きつつ俺達の到着を待っている)まで、どつか川下りを再開できるポイントとはなかるうかと、川土手を走りながら未練がましく川を観察したが、見るんじゃなかった、と言いたいがそれにはそれはそれはシビアな光景だった。ほんまに水がないのだ。わずかに堰堤の手前のみ、ある程度の水が「貯まっている」カンジだが近寄ってみるとこの水が臭い。掃除をして

いけない池の二オイといえはわかりやすいか。生臭く、瀬

んでいる。

かつてここを、江戸時代から昭和初期まで大きな筏や川舟が往来していたとは到底信じがたい。今年の濁水は特にひどいらしいことをあとで地元のオッサンから聞いた。どうしてこんなことになってしまったんだらう。中国電力による大量の取水、降雪・降雨量の減少、「緑のダム」として機能を失ってしまった森林 etc.。さまざまなファクターに苛まれ、命の源である太田川が瀕死の状態で喘いでいるのだ。

「川がこんなんじゃ、海も汚れるわけよ」とダイビングのインストラクターでもある田原男爵がボツリ。この現状、奇しくも思いつきの企画で、身を持って体感することができたのだが、まだまだ多くの人々の興味及ぶところではないわけで、それを思うとさらに暗澹たる気持ちにさせられてしまふ。江ノ川や錦川に比べて太田川がカヌー乗りになん気なのも理解できた。折り畳みカヌーを可部線で運び、市街地まで川下りの旅を楽しむ、という企画も水泡と化した。あれこれ逡巡しているうちにあつというまにゴールを予定していた加計の河川敷グラウンドに到着。テツツンが口を開いた。

「小林さん、早々とリタイアしたわけですが、いいわけはどうしまししょうか?」

「とりあえず、アユが食いたくなったので、と、ゆうことに」
合いの手を入れるように、ハラがキュと、情けなく鳴り響いた。

「が、こんなことぐらいで懲りる俺達ではない。近々、もうちょっと下流の航行可能な場所を探し出し、リベンジマッチを敢行する予定。乞うご期待。ところでちょっと前、倉本ナントカ&C.W.ナニガシ両氏がちゃんとカヌーで太田川(それももつと上流部の立岩ダムから原爆ドームまで!)を割とスムーズに下っているようなのをテレビで見たことあるけど、手品でも使ったんでせうか?」

川の漁業史 弐巻

ツていうかー 元オオシキノリが

勝手に思う太田川のことです



網から獲物を水揚げする うーん、もう一つやのう(この静かな雰囲気は漁がない証拠)



ヨ～イサ～ ヨ～イシ～メ～声も力だ網を締めよ！
(右から二人目が筆者 軍手をはいて戦闘態勢へ)

「川の漁業史」なのに、
なぜか太平洋のお話です

本誌編集スタッフ「テツツン」と私は、五年前までオオシキノリでございました。オオシキノリ(大敷乗り)とは定置網漁業の水夫のことです。私は三重県志摩半島のブリ(鰯)定置網でオモテシ(土・船の前半分の責任者)をつとめておりました。これでも当時は筋骨隆々として(？)、密かに漁労長を目指して頑張っておったのですが、病気で夢破れ、この広島に帰ってきたんです。夢をなくしていまは気が抜けた

ような生活をしております。おつと、そんなのはどうでもええことですね。

大敷ってなに？

大敷ってというのは、太田川のみならずにはイメージが湧きにくいとは思いますが、全長が軽く一キロを超えのおおきな網で、冬から春に産卵場目指して西に向かうブリを一網打尽にする仕掛けです。一網打尽といっても、網の位置は何年もおなじところで、そこに来た魚群(のごく一部)だけを頂く「待ち」の漁業です。乱獲(獲りすぎ)にながりにくい漁法と言われていて、五百年の歴史を持っていきます。

私がいた片田漁場は、ブリ定置の中でも波が荒くて潮の速い漁場でしたが、魚群の回遊が多くて、私も一日で目方七キロのブリ一万本漁獲という大漁を経験しました。あのときは、目の前にぶら下げられたニンジンならぬ、「ぬれ代(ヌレシロ)」にやだれを流しながら水揚げしましたが、さすがにその後しばらくブリの顔を見たくなくなるくらいきつい働きでした。「ぬれ代」というのは、大漁したときにもらえる歩合のことですが、体をびしょびしょにぬらしながらブリを網から引っ張りあげることが

ら、この名がついたといえます。大敷の言葉は、音や体に直接関係のあるところからくるものが多くて、とても面白いんです。たとえば、波にもいろんな種類があって、風で立つ、船のミヨシで飛び散る波を「パーパー」、波長の短いうねりを、船がしゃくられるように揺れるから、「シヤゴシヤゴ」とか。大敷言葉のことを話し出したらきりがありません。

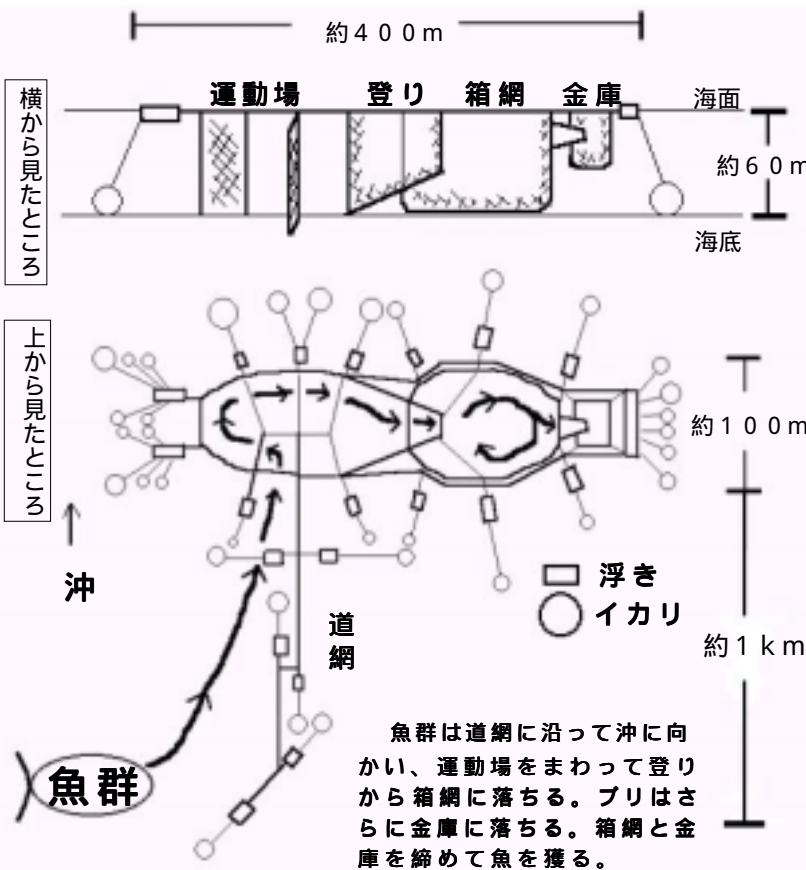
漁は海の神さんのご機嫌任せ

この国には実にいろんな魚の獲り方があります。大敷はその中でも特に自然任せの部分の多い方法です。その年に、太平洋のどっかさに比べたら芥子粒みたいに小さな漁場に、ブリの大群が来るかどうかはなんてのは、神のみぞ知ることです。もちろん、長い経験で一番ブリが通りそうなところに網を張ってはありますが、一年の間に一回大きなナブラ（群れ）が来ればその年は黒字、一度も来なければ赤字という、なんともバクチ性が高い方法です。おかげで？水夫はみんな、バクチが大好きですが、なにしろ、網一つ作って敷き込む（設置する）だけで何億というおカネが必要ですから、めったなことでは動かせません。網の場所が変わるといことは倒産や漁労長の更迭を意味します。

それに、いまの人間がどんなにすごい技術を持っていても、海の波や風、潮の流れを止めることはできませんから、その日に漁できるかどうかは自然のご機嫌任せです。まさに「お天き（機）」です。私のいた漁場では、潮が速すぎて何週間も網を持ってない（魚を獲れない）ことがざらにありました。その間水夫は、毎日毎日作業小屋で花札に興ずることになります。そんな具合で、この大敷という仕事は、人間にはどうすることもできない、圧倒的な自然の力と常にいっしょにいるというか、それが大前提にある商売です。



一度大漁を味わうと、一生忘れられん

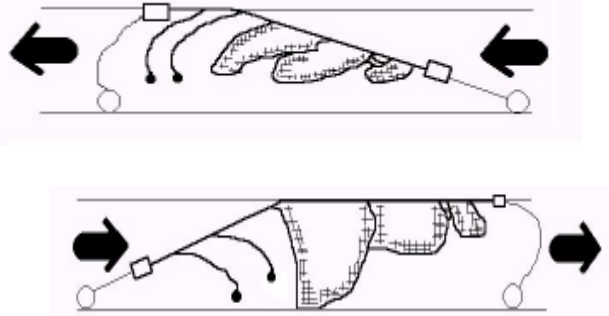


魚群は道網に沿って沖に向かい、運動場をまわって登りから箱網に落ちる。ブリはさらに金庫に落ちる。箱網と金庫を締めて魚を獲る。

大敷（ブリ定置網）の概略

名漁労長の知恵

私の漁場の漁労長は、数ある全国のブリ定置で五本の指に入ると謳われた名船頭でした。手前味噌ではありますが、彼が漁労長をつとめた三十二年間、片田漁場は一度も赤字を出しませんでした。これは毎年毎年海の状態が大きく変わるこの世界では、奇跡的なことです。彼の漁に対する考え方に、人間を圧倒する自然の厳しさからどう恵みを頂くか、「知恵」というか「哲学」のようなものを感しました。



潮が来れば吹き流し

時化と潮はやりすしせ

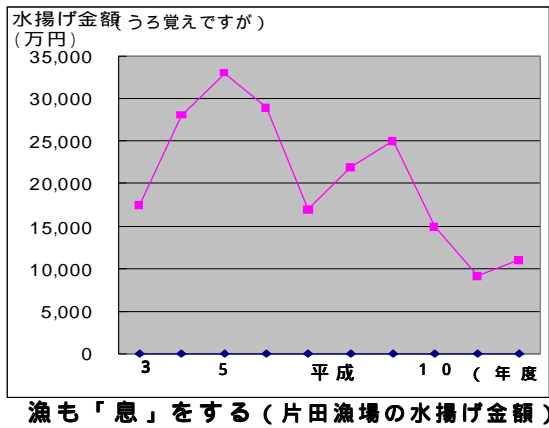
太平洋の荒波や潮の流れのエネルギーは半端じゃありません。春一番のころの時化（シケ）だと、網を支える寸径（直径およそ30ミリ）クラスのワイヤーが切れたり、何十トンから百トンのイカリがヒケル（動く）ことも珍しくありません。朝漁場に行ってみたら網がばらばらだったということもしょっちゅうです。魚を獲れようが獲れまいが私たち水夫には毎月最低補償金を支払わなければならないし、毎年の資材費用も何千

万とかかりますから、経営者の立場からしたら、毎日少しでも魚を獲りたいわけですが、それを許さない自然のパワーがあります。

少し専門的になりますが、魚を獲るためには、網が海面まで浮いて、できるだけ立っていなければなりません。そのためには、網の上の部分の浮力を強くして、下の部分の沈降力を強くする（つまり重くする）必要があります。でも、海面に近ければ近いほど風と波の力を受けやすくなり、網が垂直に立っていると潮の力をもろに受けるようになります。網が壊れやすくなるんです。網が壊れると余分な仕事が増えて、何百万、何千万と出費がかさむことになりました。魚は毎日獲りたい、でも網を傷めたくない、両方の欲求を満たすのはとても難しいんです。時として、自然のエネルギーは人間の机上の計算をはるかに上回って襲ってきます。

人間の欲望と自然の力との折り合いをどうつけるか。片田漁場の漁労長は、時化や潮は「やり過ぎす」とにしました。波や潮の力に対して、できるだけ網に負荷がかからないよう、潮が速いときは網が倒れて吹流しのように流れをかわせるように、時化のときは波といっしょに網がしゃくれないように、イカリは充分効かせておいて、網を立たせる上

部の浮力と下部の沈降力を抑え意味にしました。その代わり、時化が過ぎたり潮がゆるんだ直後が大漁の最大のチャンスだから（魚がよく動くからだと言います）、網がすぐに魚が獲れる形に戻るよう、絶妙の按配で浮力や沈降力を調整し、フジツボのような付着生物なんかで網の重さや抵抗のかけり方が狂わないよう、日頃の



点検・管理を徹底させました。そして時化の直後は、命がけの操業です。私も海にはまったり、タマが縮む思いを何度もしましたが、確かに時化の後は漁が良かった。水夫もそれは納得していました。逆

らわずに、一瞬のチャンスを待てる。漁場の自然を知り尽くした網の設計、神業としか思えないような沖での状況判断を目的あたりにしてきました。

大漁・不漁は回り物 人事を尽くして天命を待て

漁模様、海の様子は、年々で独特の「カラー」をみせます。ある魚が湧いた（大発生した）かと思えば、他の魚はさっぱりだったり、潮が速い年、時化の多い年、少ない年、毎年決して同じ顔を見せません。お役所の「漁況海況予報」などあまりあてになりません。長い目で見たら、数年に一度は全くの不漁年があり、その反対の大漁年もあります。自然の「回り」で、魚が来る年、来ない年が巡ってきます。何十年に一度は台風なんかで防ぎきれない被害にも遭います。でもそれが「自然」です。人間なんぞに逆らうことは出来ません。上げ汐があれば必ず下げ汐がある。でも下げ汐があるからこそ上げ汐がある。目先にはかりとらわれるな。自然の「息」をよく見て、チャンスにはできるだけだけ恩恵に浴せるよう、人事を尽くして天命を待て。自然の流れに逆らわず、しかしこそと

いう時には、波も風もものともせず
に立ち向かう、漁労長を見ていて
「度胸」とか「肚」とはこのこと
を言うんだな、と思いました。

「相手は自然だから仕方がない」

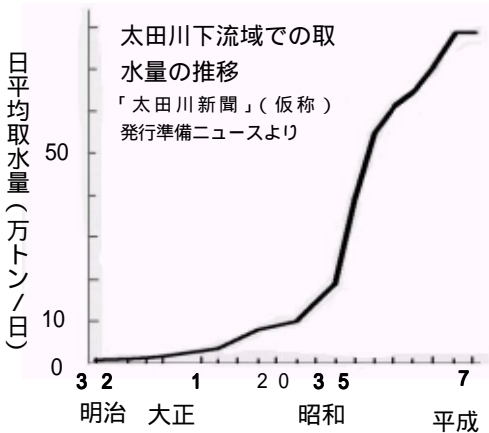
漁労長や先輩水夫たちには、なん
かすがすがしい「あきらめ」(これ
は「明らめ」と書いたほうがいいの
かな?)が、遭難や事故といった生
き死に関わるころにまで貫いてい
たような気がします。どこか突き抜
けた明るさがありました。私も技術
だけでなく、その「自然観」もな
んとか骨身に染み込ませたい、と懸
念に努力しましたが、納得いくとこ
ろまで修業できなかったのが、今で
も心残りでなりません。(大敷の世
界でも、網業者などの大資本による
経営参加や高齢化により、「神業」
の伝承がままならない状態にあり、
片田漁場もいまや存亡の危機に瀕し
ているということです。)

で、ちょっとだけ太田川
に思うことです

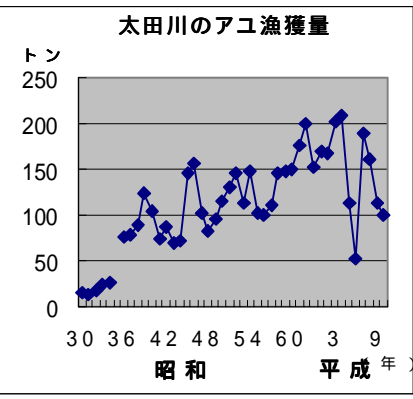
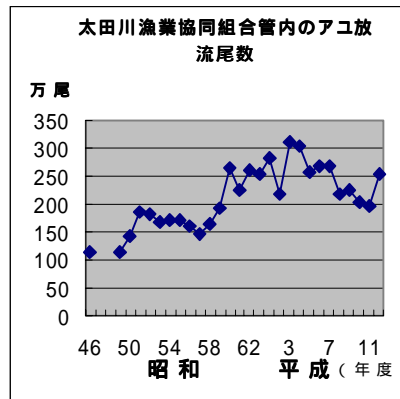
ながながと大敷のことを書いてしま
いました、広島に帰って太田川の

ことをいろいろ調べさせてもらって
るうちに、私が大敷で体験したこと
と全く対照的だな、と思うことがよ
くあります。

川は水が細いですから、いまの石
油文明の機械力をもってすれば、流
れをいじるのはそう難しいことでは
ないようです。自然の「息」に耳を
すませるといふよりは、土木工学の
計算に基づいて、人間の限界のない
「右肩上り」の欲望を満たすため
にねじ伏せる、といった感じがしま
す。今度、嘘か本当かはよく分か
りませんが、「二百年に一度の大洪水
を防ぐことが出来る」とされるダム
が完成しました。太田川での取水
量を見ても、この百年でけた違いに
増えてます。



そしてすごいな、と思うのが、ア
ユでみると、昭和30年代の発電用ダ
ム・水路建設、40年代後半の高瀬堰
建設と、アユがまともに命を引き継
いでいける太田川ではなくなっても、
むしろ統計上の漁獲量は増えているこ
とです。河川の状態が悪くても、種
苗の育成技術などの進歩によって、
幼魚を大量に放流できるようになっ
た。外洋の魚では人間がどんなに放



「太田川漁業協同組合業務報告書」より作図

「広島農林水産統計年報」より作図

流しても屁にもならんところがありま
すが、川や湖という閉鎖的な空間だ
とそれなりの効果があるということな
のでしよう。川に対しては「人事」
の力はものすごく大きいんだなあ、
と感じます。

でも、ほんの短い間にしても、人
間の小賢しい皮算用をはるかに超える
自然の力を実感してきた者として、
こんな「人事」に下る「天命」は
なんだろう、となんとなく不安にな
ります。水もあまりおいしくなくな
ったし、カキやアユの様子もおか
しいようだし、山はよく崩れるし。
しばし「息」を出来なくさせられて
いた自然が大爆発(どんな形の爆発
かは見当が付きませんが)、つてこ
とになりはしないか、と思います。

人間が力を持つということとはとても
難しいことだと思えます。でも、い
まの人間の力なんて、しよせん燃料
がなくなったら終わりなんですけど
ね。人間が体一つでできることは、
時代が下がるにつれて、むしろどん
どん少なくなってきたるんじゃないで
すか。(哲)

引用文献:

- 太田川漁業協同組合業務報告書 太田川漁協
- 広島農林水産統計年報 広島農林統計事務所
- 「太田川新聞」(仮称)発行準備ニュース

100%クリーン

インタビュー
シリーズ

こちら夢中力発電所！！

「朴風（かぜ）の家」音楽集団

梶川 純司 さん

森と水が元気じゃないと、音楽もやっつていけなくなるんですよ

このコーナーでは、「こんなふうに変わっていかんかのう。こくなつたらええのう。」といろんなことに取り組まれているグループや個人の方にインタビューします。今回は、太田川の河畔などで「水辺の音楽会」というライブ活動を展開しておられる「朴風（かぜ）の家」音楽集団の梶川純司さんにかがいました。

「水辺の音楽会」への思いを教えてくださいませんか？

「音楽が『非日常』になりすぎてきているよ
うな気がするんですね。」



水辺の素敵なご自宅にて

暮らしの中に音楽を取り戻したい、それが民謡であつても童謡であつても何でもいいんですが、日常の生活の中に音楽を取り戻したい。日々の暮らしの中に音楽が溢れる、笑顔が溢れる、つい歌いたくなる、口ずさむ、聴いてついでに体が動いてしまふ、そういうことを大事にしたいなー、と思つています。

20世紀に入つてからクラシック音楽が特別なものとして、一部の趣味の人や特権階級のものという時代が続いたんで、その弊害が今に來ているような気がします。音楽を日常の生活の中に取り戻すということは、音楽をホールの中だけで楽しむのとは相容れない面があります。

川のせせらぎの中でピアノを弾いたりすると、音楽ホールの感覚でいうとせせらぎが邪魔になりますが、僕は、せせらぎや、セミが鳴く、風がなる、木の音がする、そういう音は本来音楽と一番仲良しなんだと思います。ところが、コンサートホールに行くと、ちょっとした、時計が動く音なんかでも気になる。そういう感覚と、せせらぎやざわめきが音楽と一緒にだよ、という感覚は相反しているんですが、僕は開かれたところでコンサートをした。

音楽というのは『いま』を生きることそのものなんです、音は出した瞬間に消えてしましますから。

コンサートというのは、生きている体が、百人なら百人の人が、『いま』この空間で生きている、それぞれがそこで生きているということを音で共感することじゃないでしょうか。音楽を聴く、あるいはする、楽しむという『いま』を生きる行為を、演奏している人間だけじゃなくて、聴いてくださる方も共有する。コンサートを聴くということは、演奏する者と一緒に音が出る瞬間を作っていくことだと思つんです。

もし演奏をする人間だけが音を作るのであれば、壁に向かって吹いても吹けるはずなんだけど、壁に向かっては吹けないんです。やっぱり聞いてくれる人の目なり表情なり、あるいは身振り手振りなり、なんでもいいんだけど、生きている人がいないと演奏にならない。もちろん僕は山の中に入つて独りで誰もいないところで吹いたりしますが、それはもう一人の自分自身に音楽で問い掛けるという作業なんですわ。」

「そついつ思いと同時に、人の暮らしというのは水辺から始まるわけで、水辺から離れて生きていけない、どんな山奥にいつても谷川沿いに家を作るだろうし、泉のほとりに家を作るだろう、人間の暮らしと水辺、暮らしと音楽がひとつのものだということ、そこを大事にしたい。」

やっぱり水辺に暮らすということ、われわれは水辺を大事にして生きていかなきゃいかん、そういうことをみなさんと感じながら、川の音を聞きながら一緒に楽しみたい。

音楽としてどう生きていくか、というのと、水辺で暮らしていくということとは全然違う要素のように感じられるかもしれませんが、実はそこで日々生きていくということでは、同じものなんです。いまこの瞬間、瞬間を、音を



感じながら生きているということ、聞いてくださるみなさんと一緒に感じることによって、暮らしそのものをいっしょに、音空間をいっしょに過ごしていきたい。それには水辺でコンサートするのは当然のことだし、

むずかしいことは抜きにして、水辺というのは、僕にとっては一番音楽をしたい場所なんです。

どんな山奥にいても、山のてっぺんに行っても湧き水がありますし、水は恋しいわけで、そのわずかな水でも掘り所にして生きていけるといって、それを大事にして生きていけるということは、僕にとっては音楽をするのと同じことなんですよ。」

「森と水が元気がじゃないと、音楽もやっていけなくなるんです。」

いい楽器というのは、いい空気と水のもので、こころある職人さんがつくったものなんです。僕はフルートを吹いたり、篠笛を吹いたりするんですが、竹は環境が悪いと上手く育たないから、いい楽器になりません。僕らにとっては本当に死活

問題なんですよ。

竹は楽器になってもまだ生きています。これ（篠笛）をここで吹くとすると、この環境に慣れるまで、時間がかかります。だからコンサートをするときは、早めに行行って置いておくんですよ。この竹は、自分が置かれている自然界になじもうとしているわけですね、フルートなんかは木から金属に変えたりキーをつけたりして、すぐに人間様の都合のいいように鳴ってくれる楽器に作り上げている。でもこういう生の楽器は、そういうことはいっさいありませんから、自然界の中に溶け込もうとしている。ということは、吹き手が、この笛を通じて自然界の中に溶け込まないと鳴ってくれない。

彼（篠笛）は自然界の中で呼吸をしているわけで、僕の方を向いてない、人間の都合は関係ない。僕がいまここで演奏しようとして、この雰囲気に関係ない、自分の都合だけで無理やり吹こうとしても鳴らないんです。彼は、僕じゃなくても自然の中にいますから、僕がここで吹かせてもらうんだから、ここの自然の中に溶け込むように、気持ちも、気持ちだけじゃなくて体もそういうふうになっついていかないと、息の流れが乱れるんです。ものすごく微妙なことです。しかしシビアです。鳴らないときは本当に鳴りませんから。

それから、水や空気の汚いところへ長い間置いておくと、彼は楽器として鳴らなくなり。やっぱり呼吸しているんで、空気が悪いとだめなんです。一日・二日は大丈夫ですが、やっぱり何ヶ月も何年も置いてくとだめなんです。よく症状としてでてくるのは、割れますね。それは乾燥と湿度の問題よーといって一言で片付けられるむきもありますが、かなりメンタルなものを感じますね。」

最後にメッセージをお願いします。

「いわゆる『水辺の音楽会』として企画が始まったというより、僕自身の中で勝手に『水辺の音楽会』シリーズとして位置付けて、いろんなところでかけています。太田川だと、

京橋川と猿猴川が分かれるところの、城南通りの橋の袂の緑地帯で広島市がオーブンカフェをやっているんですが、7月はそのステージで、毎週夕方にやります。曜日はゲリラ的に、気が向いた時にやってみますので、よかったらそのぞいてみて下さい。」

インタビュアー 原 哲之
インタビュー2001年6月22日

連載

太田川水系の生き物たち

小動物豊かな広葉樹林にやってくる

アカショウビンは県内では5月上旬ころに渓流沿いの良く茂った広葉樹林へ冬を越した東南アジアからやってきます。赤くて大きなくちばしや、全身の赤色はいかにも南国の鳥といった感じで、バードウォッチャーのあこがれの鳥のひとつです。警戒心が強くてなかなかその姿が見れないのですが、キョロキョロ…というさえずりを聞いた人はあながい多いと思います。

5月初旬に渡来すると、オスはさかんにさえずってなわばりを決めます。雨や曇りの日によくさえずるので、「雨の鳥」と呼ばれることもありま



アカショウビン

1999.7.25 苅尾山にて 撮影 保井 浩

と、オスはメスのまえで翼を広げて求愛ディスプレイをはじめます。メスがオスを受け入れると巣穴掘りが始まりま

す。私がアカショウビンを観察している芸北町の臥竜山では、ほとんどの巣穴はブナの枯れ木や枯れ枝に掘られます。場所によってはスズメバチの古巣や崖土に巣穴を掘ることもあり、キツツキの古巣を利用することもあります。

巣穴を掘るのはオスで、メスは巣穴を掘っているオスのそばで見ている。そして、時々巣穴の出来具合を確かめるように巣穴をのぞきこむ行動が見られます。メスが気に入らな

いときはまた別の枯れ木を探して、新しく巣穴を掘らなければなりません。メスが気に入ったら産卵が始まりま

す。卵は1日に1個ずつ産まれ、5卵くらいになると、抱卵が始まりま

す。抱卵は雌雄交代でおこない、メスのほうが少し長く抱卵します。抱卵開始後約20日たつとヒナが孵化します。ヒナが小さいうちはメスが抱いて温め、オスが渓流性サンショウオの幼生やカエルなどの餌を運んでくれます。ヒナに羽毛が生えて体温が維持できるようにになると、メスもオスといっしょに餌を運ぶようになります。育雛は約20日間で両親はその間、カエル、サンショウオ、セミ、サワガニ、トカゲ、小魚などの餌を運び続けます。

しかし、臥竜山ではヒナが孵化してまもなくすると、テンにヒナが食べられてしまうことが多くありました。ヒナが捕食されてしまうと、また巣穴掘りからやりなおしです。そうこうしていると、ヒナが巣立つのは9月になることもありま

す。9月下旬には東南アジアにむけて出発しなければならぬので、ヒナに旅立つための十分な体力がついているかと心配させられることもあります。

アカショウビンは餌となる小動物が数多く生息できる豊かな溪流ぞいの広葉樹林を必要とします。これは、アカショウビンのすんでいる森は多様な生物を育てていることを示しており、いつまでもアカショウビンのすめる森を残しておきたいものです。

上野 吉雄

連載

写真・絵画で蘇る太田川
その三

「八木用水」と今日一般に呼ばれている16キロばかりの農業用水路は1768年、現在の安佐南区を北から南に貫き、周辺農地の旱害を解消する画期的な土木工事として完成した。この用水路の掘削は18世紀に入って何人もの人がいろいろ試みたがすべて失敗に終わっていた。最後に祇園の大工であった卯之助によって成功するのである。そして以後300年以上にわたって周辺農民に恩恵を与え続けてきた。

十 十 十

ところで、このような農業用水路掘削の話は全国各地にあるのだが、多くの場合、掘削の主人公は水利に悩む農民の中から一大決心をしたものが現れ、長年の度重なる失敗に次第に協力者も失い、為政者からは狂人扱いされ、失望や苦難を乗り越えて最後に成功を収めるという、いわゆる浪花節的物語が普通である。土師

(可愛川)の矢櫃井手掘削の喉声忠左衛門はこの代表格で、良民を惑わす不屈者として首かせをされてもなお一人で掘り続け、声が出なくなりながら初志貫徹する。その悲劇的的人生が死後、人々に我らの英雄と

してもはやされるのだ。

それに対し、卯之助は農民でなく藩の御用に預かる大工棟梁、つまりいくらかの特権を持った人間と見られていたこと。さらに彼は実際には事前に相当な調査をしていたではあるが、工事に着手して僅か25日という短期間で完成水を流した。(彼の卓越した技能が逆に周囲の者からはあまり苦労していないように見えた?)さらにまた、卯之助を監督した代官(上の絵で刀を置いて床棋に座っている男)の沖団五郎にいたっては水路が完成し初めて水が流れてきたのを見た時に熱狂し、水の中に飛び込んで、卯之助よくやった!と叫び、その泥水を手で掬って飲んだというのである。

官民共同というのは良いことのはずだが、この起承転結には悲劇的要素がどこにもない。為に過去長い間卯之助氏が充分賞賛を受けずにきたのは気の毒である。

.....

絵は『芸備孝義伝拾遺』より。場所は取水口の八木十歩一。松の木の傍で扇子を持っているのは割庄屋嘉兵衛。尺杖を持って話しているのが卯之助か? (幸田)

棚田に水を張ろう

川に水がなくなつて久しい。昔は川に満々と水が流れ子供達が春を待ちかねて、水辺に遊んだ。

山に保水力がなくなつたのも原因のひとつに違いないが休耕田に水を溜めないために、降った雨がすぐに下流に流れてしまうのが大きく影響しているのです。

ふるさと荒れはて、川は洪水に見舞われ、海は赤潮の被害に泣く。

いつからこんな日本になつたのか。よくわからないが政府の場当たりの農業政策にも原因があるのかもしれない。米の価格

調整のため休耕が奨励され、田んぼを荒らし、ふるさとの環境を壊したのか。

山の保水力を回復するには、長い日時が必要です。



先人の偉大な知恵 棚田

田んぼは日本古来の小さなダムだと古老に聞いたとき目からウロコが落ちた思いがしました。昔の人はえらい。皆さん、棚田に水を張りましょう。そしてふるさとを甦らせましょう。

広島市安佐北区可部

杉岡 三次郎

カキ打ち音頭



カキの殻通し

カキを打つおばあちゃん達の元気なエネルギーを、高齢化をむかえる日本全国の皆さんに伝えたいと思い書いてみました。

この歌は、ストリート系ミュージシャン「言霊」(ことだま)が曲をつけ広島市内の街角で歌ってくれることになりました。

瀬戸の汐風背に受けて、育ちましたよカキ打ち娘
わたしゃ75(しちじゅうご)わしゃ80(はちじゅう)

うちは50でまだ若手
広島生まれの浜育ち
お迎えくるまで！ 現役、現役、現役……

カッチンカチカチ、カッチンカチカチ
カキ打ち音頭

カキ打ち音頭

冬は朝から気合を入れる。炬燵の守はダメよダメ
夏は孫連れリゾート気分

あんたの笑顔がバーちゃんの力
つつい財布の紐ゆるむ

今日もイソイソ、お仕事お仕事
お仕事お仕事……
カッチンカチカチ、カッチンカチカチ
カキ打ち音頭

カキ打ち音頭

雪の舞い散る凍てつく朝に 今
日も出ていくカキ船が
無事に帰れよ、良いカキ積みよ

そつと後ろで手を合わす。
しびれる指に力を込めて
今日も負けないイケイケ、イ
ケイケ、イケイケ、イケイケ
：．．．
カツチンカチカチ、カツチン
カチカチ
カキ打ち音頭

インフレ、デフレ、高齢化
長く生きてりやいろいろあるさ
世間じゃ老後は暗いと言つが
窓の外には江波山桜

笑つてカキ打ちや福が来る
今日も笑つて、打て、打て、
打て、打て：．．．
カツチンカチカチ、カツチン
カチカチ

カキ打ち音頭
カキ打ち一つで生きてきた女の
意地と心意気
見んさい自慢の太腕
男にや負けんの口癖に
可愛い笑顔が返事する。
今日もバーちゃん、幸せ、幸

せ、幸せ、幸せ：．．．
カツチンカチカチ、カツチ
ンカチカチ
カキ打ち音頭

広島市中区江波
樋上 也住子（やすこ）

このコーナーでは、読者の
みなさまの投稿をお待ちしてい
ます。B5一枚以内の分量
で、紙面に表現できる形（文
章、詩、短歌、俳句、写真、
絵など）ならなんでもOK
（〒733 0852 広島市
西区鈴が峰町40 8 202
原哲之方「環・太田川」編
集部へ）。採否については当
方に一任ください。投稿して
くださった方の了解を得た上
で、内容が変わらない程度に
表現を変えさせて頂く場合があ
ります。なお、二重投稿はこ
遠慮ください。

瀬 音

川端からこんにちは

所構わず川端にあらわ
れて、出会った方に川
にまつわるお話をうかが
うこのコーナー。
今回は、ひよんなこ
緑で太田川支流の根の谷
川で育ったもと河童さん
（おん年75歳）のお話
を聞くことが出来まし
た。

とりとめの話になりますが、川の話
は汲めども尽きぬほんま川のように溢れて
まいります。わしが育った家は、上根のほ
うから流れてくる根の谷川と、可部峠の方か
ら流れてくる南原川がちょうど合流するこ
ろの下に、川に乗り出すような格好で建つ
りました。昔の中原村城（じょう）、今の
可部八丁目になります。

昔ああたりはシンニユウ（深人）とい
うて、短い根の谷川の中でも、大きな淵が
あって、わしらには最高におもしろいところ
でした。

小さいころのことです。覚えておるのが、
昭和3年ころ、三つべらいのころのことです
が、そりゃ恐ろしい大水がありました。そ
のとき、うちの家だけ、近所と総出で家
のまわりに綱をまわして、家が流れんように

電信柱に縛り付けた。幸い、家は流れん
かつたんですが、何故か電信柱が倒れつ
た。三つべらいのころのことをよう覚えとるもん
か、とよう言われませんが、何度も体験した
大水の中で特に恐ろしかったのか、はつき
り頭に焼き付いとります。

うちの家のすぐ下に、「こらで」「デビ
」と呼んどる、鋼線で大な籠を作つてそこ
へ石を詰めたものを川岸から出して、大水
のとき水の勢いを弱める仕掛けが作つてあり
ましたが、そのおかげか、うちの家が流さ
れたことはありませんが、「デビ」の下で
は、「デビ」ではなた水が力を増して、ひ
どい目に遭う家もありました。うちらか
ら、その下の八木や川内の方では、大水の
とき逃げ出せるように船が吊つてある家が多
かつたです。それから、水が上がつても大
丈夫なように、ちょっと不備な中途半端な
高さのところに柵がすえつけてありました。

それから、大水で忘れられんのは、その
とき大きな石いっつか、岩が、「こころこ
ろー」、「こころこころー」、いって動く音が
家におつても聞こえるんよ。水の力はすこ
いもんじやと幼心に思つたもんです。まあ
それが川の掃除になるんじやけどな。

わしや根の谷川の河童よ

その一

(つづく)

「環・太田川」では、読者の皆さまの活動・取り組みを応援します。イベントや活動への参加を呼びかけてください。情報をお待ちしています。お気軽にお寄せくださいね。

.....

パソコンを探しています。

みなさまは「久地北・太田川げんき村」をご存知ですか？

太田川の中流域に点在します7つの集落（間野平、野冠、宇賀、瀬谷、鹿野楽、追崎、高山）が、まとまって何かをしようではないか、と作られた組織が「久地北・太田川げんき村」です。

みなさまがこの地域に来られたら、『自然に恵まれて良いところだ』と感じられることでしょう。しかし、住んでみると眺めてみるのとでは大違いです。後ろは山、前は川。大雨が降ると山崩れ、川の氾濫を心配しなければいけません。畑で野菜を作っても、猿、猪、タヌキ、キツネ、カラスなど鳥獣類の被害も大変です。

この地区で常に生活しておられる方の平均年齢も65歳は超えています。しかし、折角の恵まれた自然の中で生活することで、嫌なことばかりを思っている方も仕方ありません。

楽しんで生活できることを考えてみようではないか。神楽、自然観察会、鮎食おう会、冠山に登ろう等、少しずつ行事をやっています。

「げんき村」内部の交流だけでなく、外部の方々との交流もやっていて、この地域の自然を大切にしたい。そのような思いを、インターネットで伝えてみたい。平均年齢65歳以上が、今からパソコンを勉強して、インターネットにチャレンジします。

そのために、古いパソコンを譲っていただけませんか。

出来上がった竹炭をお礼にさせて頂くことくらいしか出来ませんが...

パソコンが使えるまでに時間がかかると思いますが、何とか「げんき村」からみなさまに発信できるようになりたいと願っています。

「久地北・太田川げんき村」事務局より

パソコンを譲って頂ける方や情報をお持ちの方は、「環・太田川」編集部（本誌最終頁）へお願い致します。何台でも受付ます。

い
っ
し
ょ
に
や
り
ま
す
専
科



(HPのロゴです)

「環・太田川」ホームページ掲示板より

いま、「環・太田川」掲示板がおもしろい！！

アクセスできない方のために、ちょっとだけ紹介しちゃいます。

アクセスできる方は、<http://all.at/oitagawa> へ GO!

(うまく飛べないときには、

http://hiroshima.cool.ne.jp/kan_oitagawa/top.html へ！)

太田川アユ解禁

投稿者 : イカの骨 2001年6月7日23時13分

常連さんの書込が盛り上がってきました。私も負けずに！ 仕事に追われて、1日(解禁日)は休めず、2日(土)の午前中からの釣行(午後も次の日曜日にも仕事(>,<))野冠よりちょっと上流の鹿之巢(かのす)で2時間粘って0尾。津伏堰の下でやっと4尾しかも15~17cm。5月の雨不足でコケが更新せず、成長が悪いだろうと予測はしていましたが、これほど小さいとは。。。

数年前から釣った魚は全長を記録してモニターしていますが、解禁当初は19~20cmにモードがあり、1週間過ぎる成長の良い縄張りの強いアユが釣られ、17~18cmにモードが移ります。それが、梅雨時期を過ぎると成長して再び20cm前後に移っていきます。今年の場合は美味しいご馳走がなくて右往左往しているアユばかり。(アユ自体は少なくない)可哀想でしばらく本流域では釣りを見合わせようかと思っているところ。水が少ないとアユは上流を目指す傾向があり、太田川上流域は結構良いアユが連れているとか。但し、クマさんに会うリスクもあるので躊躇しています。 頑張れ、太田川！

高瀬堰魚道遡上調査

投稿者 : バッチオ尾崎 2001年6月7日16時13分

昨日(6月6日)かねてから行ってみたかった、高瀬堰の魚道遡上調査を見物に行ってきた。これは、建設省 中国地方建設局 太田川工事事務所が毎年実施しているもので、5月から6月にかけて数回に渡って高瀬堰の魚道に網を仕掛け、24時間に遡上する魚類の調査を行うものです。なんでも、「調査は魚ののぼりやすい川づくり推進事業の一環」だそうです、そんな事業があったんですね。平成3年から放流されはじめたサツキマスの遡上調査が主目的のようです。

朝10時、左岸の魚道に仕掛けられた網から引き上げが始まりました。ウエットスーツの調査会社のひとが水に入って網を絞り、クレーンで引き上げます。雨上がりと言うことで大漁(?)を期待していましたが、案の定、水に入ったひとが「今日はすごいぞ!」と声を上げています。網目は1.5cm角だそうですので、小魚は通り抜けてしまいます。引き上げ中の網の中では多数の大型の銀色の魚体が身をくねらせています。水槽に移された獲物は、ほとんどがサツキマス!!!感動ものすごいシーンです!元気いっぱい暴れるサツキマスの魚体は、遡上したてとあって、丸々と肥え、銀色に輝き、まばゆいばかりです。体長や重量を記録するのですが、元気がありすぎるので一度麻酔薬の入った水槽に移してからおとなしくさせて計測していました。勝手に見物に行ったのですが、これまた勝手に選り分け作業を手伝ったりして、淡水魚好きの私にとってはとても楽しいひとときでした。左岸の魚道ですが、サツキマスが24匹、他に巨大ニゴイやイダ(ウグイ)、オイカワ、カワムツ、アユ、カマツカ、モクズガニといったところでした。サツキマスは記録的な大漁だったようですが、他の魚種が少なすぎるとのことでした。先月の調査では、大きなコイやナマズがうようよいたそうです。採取される個体数の偏りには各魚種の産卵行動とかにも関係があるようです。



サツキマスとアユは漁協の方が持って行かれ、麻酔が覚めるのを慎重に確かめてから上流に放流するそうです。他の雑魚たちはその場で高瀬堰の水辺に放流です。午後からの右岸の調査には行きませんが、皆さんも是非一度行ってみたいいかがですか?面白いですよ。魚道調査の日程は、太田川工事事務所のHPで調べられます。

水源税について

投稿者 : イカの骨 2001年5月31日23時32分

最近、県出身国会議員と県知事の間で議論があったようです。高知、徳島、岐阜県あたりでは、かなり検討が進んでいるようで私も関心を持っています。目的税として森林・河川の保全、過疎対策など使われるのなら導入すべきではないでしょうか。但し、使い道はオープンにして、国有林野の赤字対策や無駄な公共事業に使われないよう監視する必要があると思います。環・太田川でも取り上げて欲しいと思います。

Re:水源税について

投稿者 : 安江 浩 2001年6月8日16時29分

この内容は知事が記者会見で語っていますので参考にして下さい。

<http://www.pref.hiroshima.jp/chiji/kaiken/0604.html>

環KAN学GAKU

エネルギー その三

水力発電「クリーンエネルギー」の巻

「じゃけど、太田川にはちゃんと水が流れとるし、アユも釣れるし、水不足という話も聞いたことないで。」

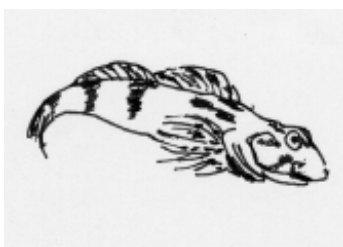
少しずつ見えてきた太田川の水力発電のことを話してみたときの、前出の「ムサシ君」のケゲンそうな返事である。他の友人からも似たりよったりの返事しか返ってこない。筆者ぐらいの世代（三十代）からすると、水が少ないあの川が「太田川」なのである。発電用トンネルに大量の水を奪われて

いることを頭では理解できても、発電所が出来る前と後で川がどう変わったか、川筋にどんな影響を与えたかという問題になると、具体的なイメージがないのが本当のところだ。

そんなことも手伝ってか、筆者などは、最近「ダムが川に悪い」とか「森は海の恋人」とか言ってマスコミや世間が盛り上がりつつあるのを見て、「じゃあみなさん、自分たちの生活にしっかりと結びつけて具体的にダムや発電所の問題とか説明できるの?」、な

んて言いたくなってしまう。子ども頃学校で、水力発電が一番歴史がある発電方法で、いまふうに入れば「クリーンエネルギー」だと教わったことも影響しているんだらうか。

しかし、川筋に長く暮らしてこられた人々は、深い悲しみや激しい怒りを感じながら、現在の太田川を見守っておられる。長尾神社宮司の佐々木盛房さんは、太田川、滝山川、丁川が合流する加計町加計で、八十余年にわたり川とともに生きてこられた。下に紹介するのは、佐々木さんの著書「山野慕情」の中で、「大地の大動脈」太田川の現状について綴られた一節だ。



Ⅳ 山野無残

これら無残とも云々の山野草を、嘯きを聞てきた大地は今、無残としか云いようのない容相に変わりつゝあり、その大動脈をなす大田川の流れば、その本来の流水を見ることが、がむに溜められ、取水堰に取られ、暗いトンネルを彷徨し、思いもかけず高砂より、突き落とされ、やと本流に合したかと思ふや、次の取水堰が口を開けて待ち構えている、これの連続が可部まで続くのである。そしてこれら発電のための施設が五十を数える。

Ⅳは哭かしている、激怒している、これほど酷使されている川が外にあるだろうか、これほど環境破壊の模範が外にあるだろうか、私の子供の頃（大正五十年代）の川を語れば、その懐かしさ、その変遷の惨や、痛々しさを口惜し涙を流し語りわねばならぬだらう。

後略

先日上流域のある集落でお話をうかがっていたとき、ある古老が、「いま都市と中山間地の交流ということが盛んに言われている、広島の方も皆さん活発にご意見をおっしゃいます。ですが、広島発展のために、人材の流出だけでなく、発電所の建設で上流・中流が犠牲になってきたことを知らずに語られる方がいらつしやいます。それだけはやめて欲しい。広島という都市が大きくなっていくときに何があったかをよく知った上で、『交流』ということを考えようじゃありませんか。」と発言された。「犠牲」という言葉で、筆者は頭から水をかぶせられたようになった。

発電所の取水で干上がった部落

井戸がかれ川水飲む

安佐町救済に県など動く

31
1621
B

井戸水の取り入れは、太田川本流の取水が次第に減少したため、井戸水がかりで生活する部落の水を飲んで暮らしている部落が、豊田電機一帯の取水が本州電力に譲渡された結果、安佐町内幾つもの部落で深刻な被害に遭っている。前町長は県をその解決策に呼び出すことになった。各部落から取水第一助役、頭から河川課長、および被災者の代表者が視察に出向いて実情を調査した。



新夕川水をくみ上げる主婦たち

この部落は中国電力井戸建設地であるが、大正十二年新設の際(安佐町)より、太田川本流の取水が次第に減少したため、井戸水がかりで生活する部落の水を飲んで暮らしている部落が、豊田電機一帯の取水が本州電力に譲渡された結果、安佐町内幾つもの部落で深刻な被害に遭っている。前町長は県をその解決策に呼び出すことになった。各部落から取水第一助役、頭から河川課長、および被災者の代表者が視察に出向いて実情を調査した。

そのため、従来の安佐町への取水を一層して、県の不便を解消しようとする動きがある。このため、豊田電機一帯の取水が本州電力に譲渡された結果、安佐町内幾つもの部落で深刻な被害に遭っている。前町長は県をその解決策に呼び出すことになった。各部落から取水第一助役、頭から河川課長、および被災者の代表者が視察に出向いて実情を調査した。

井戸水から遠ざかれた部落は、豊田電機社へ交渉して井戸水を掘り下げる費用を出してもらった。ところが、年々少くなる太田川水には追いつかず、いまは取水を全面的に止め、豊田電機社へ交渉して井戸水を掘り下げる費用を出してもらった。ところが、年々少くなる太田川水には追いつかず、いまは取水を全面的に止め、豊田電機社へ交渉して井戸水を掘り下げる費用を出してもらった。

引用文献「山野暮情」佐々木 盛房
中国新聞 昭和三十一年四月八日付朝刊
平成十三年 (広島版)

無知・無頓着とは恐ろしいものだ。でもそれは、実際電気を一番消費する立場の、多くの広島市民に当てはまることではないだろうか。「無頓着」とは、見方を変えれば大変な「傲慢」でもある。

(続く) 水本 清隆

昭和三十一年四月八日付
中国新聞 朝刊より
提供・中国新聞社

「環・太田川」進水式 やってきたでえ！

去る6月17日、
 「若鮎号」での予告
 通り、「環・太田
 川」進水式」を決
 行しました。

「行き当たりばつかりカヌーツ
 アー」はどうなった？

本誌コラム「あしたはどっちだ
 ？！」を好評連載中のブラリスト小林
 一彦氏と、編集スタッフ「テツツ
 ン」が、創刊を記念して太田川上流
 のかつての川船の湊（筒賀松原）か
 ら広島に向けてゴムカヌーで漕ぎ出
 した。みんなの心配をよそに、意気揚



揚と浜を出たのはよかったが…。
 「あしたはどっちだ?!」(2ペー
 ジ)へアクセスせよ!



ムム...このせいで...(?)

「山県石工」の仕業に一同感激!!

陸上では二人の悪戦苦闘(?)を
 よそに、「石垣博士」佐々木 卓也
 さんのガイドで、太田川が日本に誇
 る、「山県石工」の仕業を見学し
 た。一同、先人の知恵と技術にただ
 驚くばかり。中には感動のあまり石
 垣をよじ登ってしまった輩もいる。
 この模様は、来月号別冊にて再現す
 る予定。

アユは人に哲学を語らせる？

昼から、なぜか傷心の二人と陸上



班が合流して加計町の河畔で交流会。
 「丁川流域会議」代表の小田 良春さ
 んがとびつきりのアユを提供して下さ
 り、総勢2名がビール片手に舌鼓。う
 まかったでえー！小田さん、本当にあ
 りがとうございました。

梅雨の晴れ間の下、アユを頼張りな
 がら熱く哲学を語るおっさんもいれ
 ば、カヌー教室を楽しむものもあり、
 瀬音はみんなを「きげんにさせる。実
 り多い太田川談義だった。やっぱり川
 のことは川を見ながら話さなやー。

頑張れ可部線！

ちよつと心配だったのは、対岸を走
 る可部線に空席が目立ったこと。今回

のイベントにも、時間をなんとか調
 整して、可部線を使って参加された
 方が少なくなかったが、乗って残そ
 うみんなの可部線！

次回も乞うご期待！

「今度は夏の川遊びかいねー。」
 午後4時、もう次の心配をしながら、
 一同日に焼けたのか酒に焼けた
 のか分らんような赤ら顔で、やけに
 にやにやしなから帰路についたのだっ
 た。

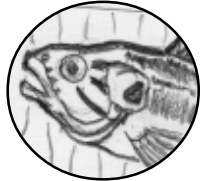
みなさんご参加・ご協力あり
 がとうございました。また真夏
 にフィールドワークをしたいと
 思います。

「環・太田川」スタッフ一同



やっぱり太田川最高！

オヤ???ニラミ



ツキノワグマは奥山に戻れないのか

6月4日、山県郡筒賀村の太田川でアユ釣り中の男性がツキノワグマに襲われて大怪我を負われた。近年、これまででは考えられなかったような場所にクマが出没するようになり、住民は恐怖を募らせている。

本誌スタッフ哲は、バイト先の教え子に、このことをどう思うか、考えさせてみました。以下にある生徒の作文を紹介します。ご意見お寄せください。

何で

クマさんが

出てくるの?

このまえアユ釣りの人がクマ

に襲われました。とても恐かつたと思います。学校の先生は、

「昔はあんなところにクマが出てくることはまずなかった。」

と言っていました。「クマが棲んでいた、山奥のドングリなんか

がある森がなくなったりして、餌がなくなったことが関係しているみたいだ。この辺でも近く

の山に団地が出来てから、今まであんまり見たことがない山鳥をよく見かけるようになったろう、あれとよう似とるよね。」とも言っていました。

山好きのおじいちゃんに聞いたら、「クマは二十年ぐらい前に、中

国自動車道が出来たところからおりてくようになった。キャンプで捨てた

ゴミなんかから、人間の食べ物の味を覚えてしまったことも関係してる

じゃろう。おまえらも甘ったるいお菓子や脂っこい焼肉なんかの味を忘れられんじやろう、あれと一緒によ。

聞いた話じゃあ、もう人里の食べ物をお口にしようになつて何代かたつとるけえ、山には戻りにくいそうじゃ。」と言っていました。

クマさんは

もう山には

戻れないの?

私は、人里に出てきたクマが殺されてしまうのは仕方がないと思います。山に戻れないんだから、何をするか分からないから、



いいんだろうけど、それは何十年、何百年かかるのかな。だから、もしまだちょっとでもドングリの森があるんなら大事にして、ゆっくりゆっくり、ちよつとずつどんぐりの森を増やしていかなくちゃ、と思います。でも、その前にクマさんが一匹もいなくなつたら...

私たちがだって...

それから、クマさんに「人間の食べ物のお味を忘れて」っていうのはとっても難しいと思う。私たちがだつてお父さん・お母さんに「変な化学物質が入っているかも分からないから、あまりコンビニのお菓子を食べてはいけません。」って注意されても、あのべろがしびれるような甘さは忘れられない。やっぱりコンビニに通っちゃう。うす味のお煮しめや魚の塩焼きばかりだとがまんできない。どうしたらいいのかな。

なんかクマさんの話から自分のおやつの話になつちゃった。変なところでつながっちゃったね。

田中 みく(十七歳)

怖いもん。でも、見かけたら捕まえて殺すだけっていうのもなんかおかしい気がします。クマさんが自分から山に戻ってくれるよう、工夫できないのかな。これからドングリの森が広がっていった方が

みずべのとしよかん

太田川水系 川の生きもの観察手帳

建設省(国土交通省) 中国地方整備局太田川工事事務所編



子どもたちを対象に、太田川やそのまわりに住む生きものたちを観察する手引き帳。魚、昆虫、鳥、哺乳類、両生類、植物、見つけやすいものが網羅してある。

ポイントポイントの自然の特色や観察の仕方や注意点など分かりやすく丁寧に説明してある。実際にフィールドで使えるよう防水加工も施しており、親子で川遊びするのに最適。

ただ、かつて川遊びといえば、年長のガキ大将から連綿と受け継ぐもので、生きものことも日常の中で、この土地の方言で、体で覚えることができた。イベント的に授業のように教わるのが、子どもたちにとって本当に幸せなんだろうか。この手帳を見ていて、ふと淋しくなった。

「川の生きもの観察手帳」は上流・源流域編、中流域編、感潮域編の三冊あり、太田川工事事務所のG.O.G.I.L.I.Mで入手できます。

「環・太田川」より

INFORMATION

「姫野雅義さん」七タトークイン広島盛況でした。

さる7月7日に、「環・太田川」主催の「吉野川から太田川の明日を考えよう 姫野雅義さん講演会」を開催しました。おかげさまで、45名のご参加があり、討論も大いに盛り上がりました。ありがとうございました。

イベントや学習会の企画に参加しませんか？

「環・太田川」では、ミニコミ発行だけでなく、川で遊んだり、フィールドワークしたり、未来を考える学習会を開いたり、いろんなことをしたいと考えています。「こんなこともしろいね」とか、「こんなこと学びたい」というアイデアをどしどしお寄せください。

「流域の歳時記」お気軽にお寄せください。

「環・太田川」では、流域の四季折々のちっちゃな出来事、楽しい催しなど、紙面の許す限りご紹介したいと考えています。みなさまも身近な出来事、呼びかけて見たいことなど、お気軽にお寄せください。地域発の通信もお待ちしています。

編集後記

先日あるテレビ番組で、タレント外人が二人出てきてアユ解禁日の早朝、久地の川でアユの友釣り競争をするというのがあった。大分裏で細工したみたいな感じと、あれだけ騒いだから回りの釣り人たちはさぞ迷惑だったろう。などと思つたものである。

でもあんなのも今日一般風景でいいかもネ。(幸田)

夏だといつになぜか風邪が蔓延しとる。わしも編集長も喉をやられた。三日ほど森進一より声が出なかった。みんなも気い付けよ！(哲)

「環・太田川」定期購読会員になりませんか？
一般定期購読会費は、
年間3,000円です。

月刊誌購読のほかにイベントや学習会の参加が無料になる賛助会員(年間5,000円)「環・太田川」の活動をさらに積極的に支援して頂く維持会員(年間10,000円)もごさいます。

会費のお振込みは、郵便振替口座 01390-6-20356 「環・太田川」事務局へお問い合わせは 左記「環・太田川」編集会議住所・電話番号へお願い致します。パンフレットを送らせて頂きます。

「環・太田川」若苗号(月刊)
2001.07.10 発行
(第三号)

「環・太田川」編集会議発行
〒733-0852
広島市西区鈴が峰町40-8-202
原 哲之 方
Tel・Fax 082-278-1044
HPアドレス:
http://hiroshima.cool.ne.jp/kan_ootagawa/

年間購読 3,000円
一部 300円